



心に残る

普及版第二集

とっておきの話

潮文社編集部編

心に残る
とっておきの話

潮文社編集部編

普及版第二集

心に残るとっておきの話 第二集〈普及版〉

平成 13 年 10 月 25 日発行

編 者 潮 文 社 編 集 部

発行者 小 島 米 雄

発行所 株式会社 潮 文 社

〒 162-0843 東京都新宿区市谷田町 2-31

電話 03-3267-7181 (代)

振替・00140-7-69107

組 版 株式会社 フカサワ

印 刷 有限会社 埼京印刷

製 本 株式会社 越後堂製本

© CHOBUNSHA 2001 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-8063-1351-3

人間の再発見

新装普及版の発行にあたって

人生はドラマだといわれる。

しかし私達は、日々、その機微きびに触れながら芳潤ほうじゆんな高級ワインの味と香りかおを、安価な合成酒なみに飲みくだしてしまつてはいないだろうか。

『心に残るとつておきの話』が、多くの読者の感動を呼んできたのは、市井しせいの実人生じつしんせいの中に、世の名作を凌しのぐ真実がちりばめられているからに違いない。

「人間万歳ばんざいと叫びたくなるような一冊です」「何気なにげない巡り合わせめぐりあわせを、流砂りゅうさのように流してしまふか、玉として残すかは、その人の感性かんせいを表わすものでしょうか」

「絶句ぜっく——目のウロコが数十枚落ちる音がしました」「心底こんていをゆさぶる強い衝撃しょうげき、かつて味あじわつたことのない感動は、魂たましいの根源こんげんを問うに充分であり、感謝せずにはいられない」

「真実の言葉がこんなに胸を打つものかと思わず本に有難ありがとうと言つてしまいました」

「どの編も人の真実の心かんを観かんずることができる。正ただに現代の經典きんげんといふべきものかと思

います」「65年生きて、これ程ぎりぎりの線で感動、感銘かんめいを受けた事があるだろうか。何かこれからでも出来る様な気がします」「この本は本当に素晴すばらしい。山にたとえれば、本の富士山です」「この本を読んでいると優しくなれる。失いかけていた自分の原点に戻る。そんな本です」「ひたひたと押し寄せる感激に胸が一杯です。仰あおぎ見る人生讃歌さんかの金字塔きんじとうです」等々々——

全国から寄せられた、こうした読者の声にも心打たれるものが多かった。

もっと読みやすく、もっと安く——という読者の方々の要望ようぼうにお応えし、文字も大きく、ふりがなも多くして、ここに新装普及版を出すことにしました。一冊あたりの収録しゅうろく篇数は減りましたが、順次発行の予定です。少しでも多くの方々に読んでいただけると思います。

潮文社編集部

（なお、筆者の職業等は旧版当時の記載のままになっています）

生きた人間学

業績一流、人物三流という言葉がある。必ずしも戦後のこととは限らないが、特に大戦後においては、人間の上に業績があり、心の上に物があり、そして文化の上に経済があつた。

社会全体が経済第一主義、従つて効率第一を当然のように思い込み、目前に与えられているものの貴重さを見落して、ひたすら「明日」を求めて突っ走ってきたのである。こうして日本は世界に冠たる経済大国になったが、そのあとにはかけがえのない自然が、環境が破壊され、肝心な人々の心まで侵されてきたことを認めないわけにはいかない。

私達は今さらの如く、失われたものの大きさに啞然とし、慄然とするのである。

今問われているのは人間であり、真の意味での文化である。「心に残るとっておきの話」が心ある多くの皆さんの協力によって生まれ、全国の読者から熱烈な支持と共感

をいただいているのは、今日という時代に寄せる皆さんの熱い願いがあつたからと思
われる。

本書第二集のために寄せられた原稿げんこうは一二五八篇、その中からここには五八篇を収
録させていただいた。投稿とうこういただいた皆さんにはこの紙面を借りて厚く御礼を申し上
げたい。

平成六年七月

潮文社編集部

（この普及版第二集には四六篇を収録、残り十二篇はいずれ後篇に入れる予定です）

心に残るとっておきの話 普及版第二集／目次

人間の再発見

生きた人間学

潮文社編集部

母の日のプレゼント

松本よう子

主婦

九

ひとりだけの卒園児

黒宮 朝子

保母

一四

奇 跡

尾崎 正若

大学名誉教授

一八

火口の誘惑

奴田原智明

会社員

二四

歌を聞かせて

宮谷内純子

学生

三〇

花瓶の水

広瀬 嘉明

会社員

三二

丸い小石

渋谷 転起

学習塾経営

三四

ある日のバッテリーボックス

仁平井清次

元小学校教諭

四一

母の祈り

青竹先生

海老の天ぷら

ラッシュアワーの車中で

六十一回目の合格

天国から来た犬

いも

ある臨死体験

叔母のこと

置逃げ

私の主義を通して下さい

ホール・イン・ワン

茶畑の出来事

葛西 久代

会社員

四六

小坂 巖

公務員

五〇

華村 大介

薬局経営

五七

小林富次郎

呉服店経営

六一

新井 竹子

元ろう学校教諭

六五

桜井 晶子

主婦

七二

林 路子

主婦

七九

西澤みさを

主婦

八二

神野志季三江

高校教諭

八七

阿部 勝児

音楽教師

九六

川野 広

元大学教授

一〇二

堀江 武

会社員

一一〇

中村 記代

農業

一一六

祖母の手の中	中田 雅子	主婦	一一九
花明かり	金子 昌夫	機械工場経営	一二三
十五夜の杵音	高久じょう	主婦	一二六
この母と共に	高畑富美子	主婦	一三二
鉛筆の碑	佐藤誠一郎	元小学校校長	一三八
横一文字の手	池内はじめ	無職	一四一
ある少佐殿	小西 忠彦	無職	一四五
卒業文集最後の二行	一戸 冬彦	大学教員	一五〇
愛する姪へ	桑原加代子	輸入卸し販売店経営	一五八
九〇円の痛み	清家 志保	フリーター	一六九
孤独	山田 喜彦	無職	一八一
わたしのサンタクロースさん	明尾 昭吾	地方公務員	一八八
アナタ	佐々木英一	元公務員	一九二

ハツエと父	雜賀美代子	主婦	一九四
アザの神様	斉藤 紘子	主婦	一九八
大往生	豊永 裕	農業 水墨画指導	二〇二
お母さん	江口 一男	無職	二〇九
指輪	藤田 繁子	主婦	二一六
母ありき	渡辺 武任	農業	二二六
枯れないバラ	山本 裕	元小学校教師	二二九
老人ホームのエリート	木戸 克海	会社員	二三九
古本屋の椅子	兼光恵二郎	会社相談役	二四三
生きていてこそ	中西 裕子	ペットショップ経営	二五一
丘の上の父	長谷川光二	無職	二五六
仏さま	久保ふさ子	結婚相談	二五八

母の日のプレゼント

松本よう子

昭和一六年生（船橋市）
主婦

ある五月の日曜日の朝である。私は地下鉄日比谷線の、一番前の車両のまん中に腰をおろしていた。休日の、しかも朝の八時頃のこと、この車両の中は、私のほかにはただ一人、若い男がすみの席でぐっすりと眠っているばかりである。夜間の仕事を終えて帰るのか、アルバイトの学生風で、頭を窓にもたせかけ、ジーパンの足を広げて、電車の振動をもともせず眠りこけていた。

私は今までに、こんなにすいた電車に乗った記憶はない。いつも人がいっぱいいて、色とりどりの服装が目についたり、大人の話し声や子供等のさげび声などがそうぞうしく、なぜ、こんなに大勢の人々が電車に乗って、どこかへ行かなくてはならな

いのかなどと、自分のことを棚たなに上げて、うるさく思い、しまいには頭痛がしてくるのであった。

それが、今日は、この広い車内にたった二人、しかも一人はぐっすりと眠りこんでいる。妙に落ち着かなくて、下車駅の改札口かいさつぐちがホームの前方なので、一番前の車両に乗ったことを後悔こうかいしはじめていた。まん中へんの、四両目か五両目にすればよかったなどと思いつづけていた。が、やがて、「次は大手町おおもてまち」というアナウンスがあり、私は、きつと五、六人は乗ってくるにちがいないと勝手に思いこんで、かすかな期待をいだいていた。

電車のドアが開くと同時に、大きな話し声が耳に入り、靴音くつおともあららしく二人の男が歩いてきて、私の前の席にドシンと音をたてて座り、長い足を床ゆかにはうり出した。まっすぐ前を見ていた私は、二人を十分の一秒ぐらいの速さで目のフィルムに焼きつけると、瞬間にまぶたをとじた。

何ということだ。このすいた電車の中に、私だけが乗っているといつていい車両の中に、入って来たのはパンチパーマと角かくがりの、サングラスの男二人だけだったので

ある。しかも、私のまん前に座って手足をゆらゆらふりながら、大声で話しはじめた。私の目の奥から電流が走り、「ヤーサン」という文字が稲妻いなづまのように頭の中にひらめき、脳のうの中心から、「目をつむって、ねたふりをせよ」と命令が飛んだのだ。

「決して目を合わせてはいけない。急に立ち上って席を変えてはいけない。ただ、ひたすら眠っているふりをせよ」

昔、親が兄弟から聞いた言葉である。私は全身を硬かたくして、じっと目をつむっていた。にぎった手のひらが汗ばんで、まぶたがひくひくする。頭のすみで、どうして四番目か五番目の車両にしまったのか、どうして、すみの席でねている若い男が目を覚さまさないのか、なぜ、電車を一台あとにしまったのかなどと、同じことを際限さいげんもなく思いつづけていた。

緊張きんちょうがつづいて、ぎこちなくなっていたのであろう。ひざの上に乗せていたハンドバッグがコロリと床ゆかに落ちた。ハッとしたその時、はじめて二人の男の話し声が耳に入ってきた。細目ほそめをあけて、急いでバッグを拾うと、また目をとじた。二人の話し声をはっきりと聞こえてくる。

「よわったよ」と、一人が言っている。

「おれもだよ」と、もう片方の男。

「物がいいか、金がいいか」

私はいよいよ身を硬くした。小さくいびきぐらいかいた方がいいのだろうか、真剣に思ったりする。

「全く、人さわがせだぜ」と、一人。

「ひでえやろうだ」と、もう片方。

私はひざがしらがふるえてきた。

「どうしてくれる？」と一人。

「母の日なんか、考え出したやろうはどこのだいっだ」

電車は止とまった。二人の男は、「よいしょ」と、かけ声で立ち上がると、ドタドタと降りて行った。六本木の駅であろぽんきぎであった。

電車が走り出した。その時、私はやっとすべてがのみこめた。顔から肩から背中か

ら、手先足先から、緊張が一度にとけて、ダラリとしてしまった。

その日は、五月第三日曜日、母の日であった。あの二人の男は、母の日のプレゼントの相談をしていたのだ。パンチにも角がりにも、生んでくれた母があつたのだ。

私の母は、もう亡くなつて久しい。すっかり忘れていた。緊張のとけたホッとした気持ちと同時に、胸の奥の方からじんわりとした温かみが少しずつ広がってきた。昔、火鉢の炭火に手をかざした時のような、ほのぼのしたぬくみが私を浸していった。そして、そのぬくみは、ひさしぶりに頭に浮かんた母の顔をやんわりとつつんだ。

あの時の、パンチパーマと角がりとサングラスと、そして母の日のプレゼントとのとり合わせがあまりにも思いがけなくて、いつまでも忘れられない。そして思い出すたびに、あの緊張と、そのあとのぬくみ、そのぬくみにつつまれた母の顔が浮かび、いつまでも、その思いをかみしめている。

ひとりだけの卒園児

黒宮 朝子

昭和二十二年生（三重県）
保母

「恵理ちゃん、まだかしら」

様子がよく分からないので、やきもきした気持ちで、私は職員室の時計を見つめていた。

三時を少しすぎている。

「服部さん、いらっしゃったわよ」

同僚の声に慌てて、振り返る。ガラス越しにお母さんと妹、恵理ちゃんの三人の姿が見えた。

私は、外へ飛び出した。